文学の杜

仙台文学館友の会会報

第56号
平成30年3月20日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022（271）3020
仙台文学館のホームページ
http://www.sendai-lit.jp/

スタートは「田沼武能写真展　時代を刻んだ貌」

30年度展示　秋に「連載40周年記念　ガラスの仮面展」

新年度は、特別展「田沼武能写真展　時代を刻んだ貌」でスタートします。田沼氏は65年におよぶ写真家人生において、世界中の子どもたちのすがたを撮影し、数々の賞を受賞しています。その一方で、時代を象徴する文学者・芸術家たちの「貌」をライフワークとして撮り続けてきました。

「貌には、それぞれのドラマを演じてきた人間の味わいがある」と語る田沼氏。本展では、そのようにして写し撮られた昭和を代表する文化人たち約130人の肖像写真を展示します。写真家・田沼武能が迫る、多彩な人間たちの「貌」をぜひご覧ください。

夏休み期間には、恒例となりました「こども文学館えほんのひろば」を開催します。今年のテーマは、児童文学者・たかどのほうこさんの作品世界。たかどのさんは、代表作『まあちゃんのながいかみ』をはじめ、「つんつくせんせい」シリーズ、「へんてこもりのはなし」シリーズ、『おともださにナリマ小』など、多くの絵本・児童書を手がけてきました。この展示では、その作品の数々を紹介します。また、たかどのさんにご登場いただいてのイベントも企画中です。どうぞお楽しみに。

川端康成（1954年）
撮影：田沼武能

10月から始まる秋の特別展は、「連載40周年記念　ガラスの仮面展」。1976年に連載が始まった美内すずえさんの漫画「ガラスの仮面」は、演劇界の天才少女・北島マヤとそのライバル・姫川亜弓が主役の座をめぐって競い合うドラマを描き、世代を超えて多くの読者に支持されています。現在までに単行本49巻が刊行されており、累計発行部数は5,000万部以上。アニメやドラマ、舞台にもなりました。初めての本格的な展覧会となる本展では、貴重な原画を中心に、その作品世界を振り返ることができる内容になっています。

そのほか、仙台文学館に新たに寄贈いただいた資料を紹介する「新収資料展」も開催いたします。

イベントや講座も多彩な内容を予定しています。館長・小池光の短歌講座をはじめ、短歌・俳句・川柳合同の吟行会「ことばの祭典」や「仙台朗読祭」、「仙台文学館ゼミナール2018」など目白押しです。7月14日㈯には、日立システムズホール仙台にて、こまつ座公演「父と暮せば」を上演します。敗戦後の広島を舞台に、深い心の傷を抱えながら生きる被爆者の娘とその父の姿を描いた、井上ひさしの代表作の二人芝居です。お誘い合わせの上、ぜひこちらもご来場ください。

今年度も仙台文学館で豊かな時間をお過ごしいただければ幸いです。

（学芸室　三條　望）

「ガラスの仮面」
展覧会のための
特別描き下ろし原画
(c) Miuchi Suzue

仙台文学館平成30年度展示予定

◆特別展「田沼武能写真展　時代を刻んだ貌」　4月21日㈯～6月24日㈰
◆夏休み企画「こども文学館えほんのひろば　たかどのほうこの世界」　7月14日㈯～8月26日㈰
◆新収資料展　第一期　9月1日㈯～9月24日㈪・祝
◆特別展「連載40周年記念　ガラスの仮面展」　10月6日㈯～11月25日㈰
◆新収資料展　第二期　12月8日㈯～3月31日㈰
◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」　1月10日㈭～2月11日㈪・祝
＊タイトル、会期は予定です

文友一滴

平成4年に49歳で没した干刈あがたがずっと気になっていた。昭和63年に新聞小説の『黄色い髪』が目にとまり読むうちに、背中がさわさわしたことを覚えている。まだあまり世間で問題になっていなかったいじめ、その標的にされ立ちすくむ少女と母親、教師等の情景が実に「リアル」に描かれていた。小学生二人の子育て奮闘中だった私はなんだか怖くなり、それ以上読めずにいたら、5年後テレビで作家の訃報が伝えられた。

平成20年、文学館ゼミナールで干刈作品が取り上げられると知ったとき、今度は迷わず申し込んだ。幸いなことにそこで長年の干刈ファンと知り合い、平成26年から読書会をはじめている。SNSを駆使して関連資料を集めるその凄腕ファンのおかげで、作品発表当時の社会状況等も知ることができるのがこの会の特色だ。

政府は女性の社会進出を推進するキャンペーンを展開中だが、干刈あがたは80年代から女性の生き方の変化とそれに伴う家族模様、人間関係を描いている。よいことも悪いことも冷静に書き分けているので、男女共同参画世代の男女にこそ読んでほしいと思う。

「平成」の元号は31年で終わることが決った。干刈作品に「昭和」から「平成」に変わる自粛ムードの夜を高校生3人の目線で描いた「マジ」という短編がある。テレビCM自粛や番組変更などが話題になり、違和感を覚える高校生3人が、そのつど当時流行り出した言葉「マジ?」「マジで?」を連発する。世相の活写と言語感覚、ラストの奇抜さに感心した。今生きていたらどんな作品が生まれたのだろうと思う。

干刈あがたの全作品を発表順に読むという読書会の目論みは半分近くまできた。時代が過ぎても色あせない干刈文学の深さと広がりの豊かさに魅せられている。

（近）

私と郷土と文学 ⑭

津軽に「ジョッパリ」という方言がある。強情っ張り、意地っ張りな性分を指し、褒め言葉ではない。しかし、津軽人の心情の底に埋もれている何かを示唆しているようにも思える。「ワダ（私）は日本のゴッホになる！」と世界に名を馳せた青森生まれの棟方志功。顔を版木につくほど近づけ、一心不乱に彫刻刀を動かす執念にも似たあの姿は「ジョッパリ」を彷彿させる。長部日出雄『鬼が来た』は志功の生涯を描いた佳作。

私は津軽と南部、両方で暮らしたことがある。とはいえ、両親が津軽出身ということもあり、より津軽弁に馴染んできたのだが、社会人になったときには、方言コンプレックスにしばしば見舞われた。それがいつのころか、方言が見直されるようになり、昨今取り沙汰される地方消滅問題は方言衰退の問題につながっているという人さえいる。そうなったら、石川啄木の「ふるさとの　訛なつかし　停車場の　人ごみの中に　そを聴きにゆく」はどう詠み継がれていくのだろうと思ったりする。

浅田次郎『壬生義士伝』に登場する南部藩士のセリフは盛岡弁。感謝の言葉「おもさげながんした」がよく出てくる。ぬくもりが感じられるのだが、津軽藩士ならどう言うのだろう。ひょっとすると、互いの感謝の言葉が通じ合わなかったから、対立していたのだろうか……、これはもう想像にすぎない。津軽弁を世に広めたのが弘前出身の放送作家伊奈かっぺい。笑いを交えた絶妙な語り口は人々を魅きつけ、方言はその地域の文化であることに改めて気づかされる。

井上ひさしは『ニホン語日記』で「できるだけたくさんの方言があった方がおもしろい」と書いている。明治初期の標準語をめぐる戯曲『國語元年』はたしかにおもしろくおかしく読める。未読の方には一読を奨めたい。「へばな（それではさようなら）」。

（其田敏美）

方言あれこれ

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文友の部屋

✻「まんず、けっこ」我が家に遊びに来た青年A君は、一瞬うろたえる。母の発したこのひとことを受け止めかねているのだ。あの後、お母さんが饅頭を盛った鉢に手を添えなかったら、僕はあの言葉を決して理解できなかったねと、40年経った今も彼は笑う。母は「お饅頭を食べなさい」と言ったのだった。

（さや子）

「文友の部屋」の原稿募集

150字程度で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

100万人の年賀状展終了

1月10日から2月12日まで、恒例となった新春ロビー展「100万人の年賀状展」（仙台文学館主催、仙台文学館友の会共催）を開催した。今年で16回目。

好きな作家や作品の一説などの言葉と、写真や絵手紙などによる年賀状、またテーマ部門には旅の思い出をしたため作品など、641点が寄せられ、会期中3700人近い来場者で賑わった。小さな紙面の中で言葉の交流を楽しむ参加型企画として、今後も続けていきたい。

◆会員情報コーナー◆

▽佐野のぶさんが、エッセイ集『まだ、ゆめみている』を自費出版しました。県・市の図書館で借りることが出来ます。

風と歩こう ⑤

Photo by Ryuji Sasaki

いつもの門松が飾られてあるのを横目にして、企画展を見に足速やに文学館の玄関を入る。帰り際あらためて門松を振り返ってじっくりと見た。真ん中に下がる紙垂（しで）はビニールで覆われ所在無さげに風に吹かれて揺れていた。一方、縄の芸術と思われる注連縄にいたく感心した。

仙台の伝統的な門松だそうだ。

最近は、三蓋の松に輪飾りをつけ、玄関にはお飾りを下げてお正月様を迎えるのが仙台の風習である。

伝統門松はまさしく門のような形に松などを取り付けてあるのだ。松と松の間には竹が横に渡されてその竹に技巧的になわれた注連縄がまかれていた。松のてっぺんがしなっていたのは笹が取り付けられていたからだ。松の根元には薪のような木が巻きつけてあった。縄で作られた盆のようなものは何なのだろうか。

風に吹かれてブ～ラブラ。せめて雪や雨の降らない日にお目にかかりたい。神様が迷わないように紙垂がやさしい風に吹かれてひらひらさやいでいるような日に。

（一）

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第56号をお届けします。

▽桶川にあるさいたま文学館を訪れた。駅を出て歩き始めたらなんとケヤキ並木の通りがあり、ややしばらく歩くと公園の中に大きな建物。その中に文学館はあった。ちょうど国木田独歩の『武蔵野』の朗読会があった。どこかに行くともうひとつ、知らない世界が広がる。（一）

▽先日テレビで、夫を亡くした老婦人が「お寂しいでしょう？」と問われていた。「はい」とか「いいえ」とかで応じるのかと思っていたら「寂しいというより、空しいです。主人主導で生きてきましたから」と白髪の美しい顔を上げて、きっちりと答えていた。私はその姿と言葉の精密さに感動してしまった。（近）

▽インフルエンザの襲来とともに幕を開けた平成30年は、大雪、転倒、肉離れとたたみ掛けてきた。だから、本とテレビを行ったり来たり。感動に涙しているうちに、青タンも消え、クシャミと鼻水の季節が到来していた。「どんな年にしたいの」と、力を取り戻した温かい日差しが背中に問いかけてくる。（和）

▽郵便物を投函する時、ポストの前でかすかなためらいを感じる。文面に失礼はないか、誤字はないかと心配になる。それは終了時間の合図で答案用紙を提出する時の気持ちによく似ている。このまま出していいかと不安になるのだ。以前、郵便番号の欄に電話番号を書いて出し、呆れられたことがあったっけ。（佐）

友の会随想

文と人と

友の会会員　伊藤　まつ子

『当教室で学び得たものを基礎に「文」と「人」とをさらに磨き上げ、すばらしい人生をお送りください』

校長　井上ひさし

これは22年前に「井上ひさしの作文教室」に「入学」した時の修了証書、最後の3行である。

会場が一関。仙台から車で3日間通った。一関に住む友人が都合で行けなくなったからと私に誘いがきたのである。

決して近い会場ではなかったが当時のわたしは若かったし、好奇心もあったし、学びたかったこともありわくわくの気持ちでありがたく参加した。実に充実した3日間だった。

さて「3日間で何を学んだのか説明してみなさい」とテスト問題を出されたら、合格点は無理だが、先生の数々の教えの中でわたしを捉えた言葉がある。

「あなたが体験したあなただけの物語を書くのです。最初の読み手はあなたです。あなたが読んでわからないものは人にも伝わりません」これには笑ってしまった。そしていままでのもやもやが、途端に消えた。つまりあなたらしい文章をまずあなたがわかるように書くということ……と解釈することにした。

仙台に「日曜随筆」という月刊同人誌があり時々河北新報文芸欄にも登場していたのでここで書けたらいいなと憧れていた。すると偶然にも入会している同級生から誘いがかかった。しかしどうもわたしにはすべてが向いていないことがわかったので断った。すると彼女が言った。あなたの軽い文がいい……。

ほんとうにこれでいいの？と思い続けつつ10年書いてきた。……が残念なことに会員の高齢化と原稿が集まらなくなったという理由で今年一月発行の「さよなら特集号」を最後に廃刊となった。

62年間続いた月刊誌だった。

文章を書くというつながりで素敵な人達とたくさん出会えた。大切な時間を割き、惜しげもなくユーモアにあふれた「作文教室」を開いてくれた井上ひさし先生のおかげだ。

何度でも読みたい修了証書をわたしは持っている。

井上ひさし資料特集展 vol.7

大事なものは

井上ひさしの国語教室

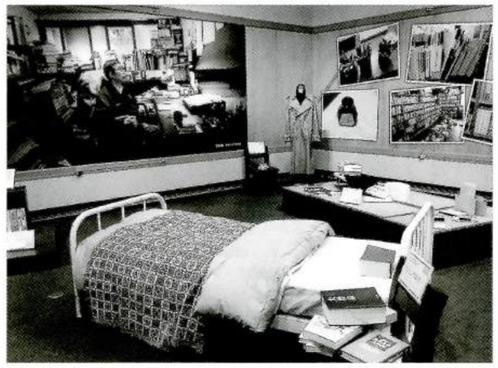
誰かと話し喧嘩する。「1たす3は」と計算し、米を量り、煮炊きをする。頼まれれば地図を書き、手紙を書く。朝から晩まで、夢の中でも、泣いたり笑ったりする。私たちは言葉の中で生きている。井上ひさしは、その言葉と、本気で向き合っていた。資料特集展vol. 7「井上ひさしの国語教室」はその証の一部です。

どの本も、辞書でさえ、全部この世で一冊の「私仕様」にしてしまう。その果てしないように思える作業から、作品たちを生み出していたのか。まるで、混沌から世界や神々を創り出す神話のようだ。

だからどの作品を観ても、何を読んでも、安心して感動できるんだ。笑いと涙の渦にもまれても、そこにはいつも確かな先達がいる。私たちは、彼を羅針盤として歩いて行けばいい。展示資料を見ていたら、自然に背筋が伸びて、温かい手で背中を押されているような気がしてきた。

会場には、独特な語り口の作家の声が流れている。文章講座の時のものだ。帰る前にちょっとだけ、そんなつもりでビデオデッキの前に座ったら、立ち上がれなくなってしまった。

言葉という本当に大事なものに、正直に真面目に向き合っていこう。（和）



井上流書物取扱法＜本の十徳＞編のコーナー

物語に寄り添う素朴な擬音たち

展示室リーディング「どんぐりと山猫」

袖幕も黒、バック幕も黒、床に敷かれた布も黒、展示室の一画が黒一色の舞台になっていて、ちょっと胸がときめく。小さなテーブルを覆うクロスがまたいい。紺地に白い藤の花柄は大きな木綿風呂敷のようで、賢治の世界に入る気持ちをかきたてる。さあ、物語の始りです。

一郎少年は山猫から手紙をもらい、山の中へと訪ねて行く。その道のりで少年は自然の出す沢山の音に出会う。ざあっと風が鳴る。栗の実がばらばらと落ちる。笛吹の滝はピーピー。草はざわざわと風に鳴り、きのこの楽隊はどっとこどっとこと演奏する。どんぐりはパチパチと音を立てて出てきて、わあわあわあと騒ぐ。

賢治の作品には、オノマトペ（擬声語・擬態語）が多い。音が状況や風景を生き生きと表して、物語に鮮やかな色彩を感じさせる。

今回のリーディングでは、この擬音の出し方がおもしろかった。新聞紙、ちいさな桶、はさみ、ベルトなど、どこにでもあるものばかりで工夫され、しかもその道具を観客に見せるという発想だ。様々な音を、見ながら聞いているのだ。奇をてらったり気取ったりしない賢治の作品に、それはとてもよく似合っているように思われた。

演じるのは、俳優の白鳥英一さん、オカリナ奏者の熊谷真弓さん、人形遣いの伊藤哲さんの三人、息もぴったりのちいさな賢治劇場だった。（佐）

本を片手に

『かたづの！』

中島　京子

大雪が降り福井県では1500台の車が立ち往生した。亡くなった人も出たというニュースを聞きながら『かたづの！』を読んでいた。吹雪の中を黙々と進む清心尼の国替えの強行軍のところは胸が痛んだ。

まずはあらすじだが八戸根城の祢々と一本の角（片角）しかない優しい目のカモシカとの出会いがあり、祢々の願いから城へ連れてきた。そのカモシカは年をとって死んでしまった。祢々は角を守り神として大切にし、ある時からかたづのは祢々の心に生きることになる。しかもかたづのは、この物語を進行させていく語り手となっているのだ。

祢々は結婚して数年後、夫や息子が三戸南部氏の叔父に相次いで謀殺されたらしい。藩は揺れていた。祢々は女亭主になると宣言。藩の反対する者に向かっては近江の直虎も、伊達政宗の伯母君阿南の方も女亭主であったと説得した。祢々は「戦で一番大切なことは、戦をやらないことである」を信条にし、時を稼いでいた。その後娘婿が藩主になるが祢々は清心尼と呼ばれる尼僧になり実質的には女大名として藩を引っ張る。紆余曲折があって戦いせずして国替えをしていく。最終的には遠野に行きつくのだ。そこまでのところにカモシカはもちろん猿や、河童、化け猫や海猫、ペリカンまでお出まし。妙にファンタジックで暗くはない時代小説である。

史実と遠野の伝説をいっぱい織りこんで女大名祢々（後の清心尼）の生涯が著されていた。テレビでは大河ドラマ「女城主直虎」が放映され、終了したばかり。東北にもあったのだ。いたのだ。夫や息子を謀殺されても敵討ちの戦いをするのではなく知恵と機転を使い、命の大事さを一番にして国取り合戦に立ち向かっていった清心尼のことがよくわかる。

本を読み終えて又々遠野に行ってみたい気になっている。

解説は文芸評論家の池上冬樹氏。集英社文庫。（一）

第33回読書会

地球をめぐる異星人のせめぎ合い

三島由紀夫『美しい星』

深夜、埼玉県飯能市の古い大きな屋敷を一台のフォルクスワーゲンが出発した。夜明け前に数機の空飛ぶ円盤が現れるという宇宙からの予告を受けて、羅漢山に向かうこの家族はそれぞれ、火星、水星、木星、金星からやってきた4人の宇宙人だった。

父親の重一郎は、美しい星地球を守らねばならないという使命感を強く持っている宇宙人だが、一方仙台には、地球人を滅ぼそうとする別の異星人たちが住んでいた。

地球上で宇宙人が敵対するといった奇想天外な物語が、あの三島によって書かれたことに、参加者の誰もが驚きととまどいを感じたようであった。結末は…。

仙台が舞台となる章には、市内の様々な場所が実に詳しく出てくるのだが、それは三島が実際に仙台を見て回って記録した「仙台日記」に基づいたものだという。

UFOが出てくるような物語にも、やはり三島の美しく古風で難解な表現はあり、辞書を引いても出ていない言葉に悩まされたりした。分かりにくい内容を現実と非現実に分けてノートを取り、毎日読み進める努力をした人もいたほどである。

今話題になっているICBMや水爆実験などに触れている場面もあり、50年前に書かれたこの作品は、地球が抱えている解決し難い問題への遥かな警鐘とも思われた。

12月13日、8名出席。（佐）

第34回読書会

武士の名誉をかけた復讐の歳月

吉村昭「敵討」

読書会にとって初めての時代小説である。

伊予松山藩の江戸藩邸に仕える24才の熊倉伝十郎は、伯父と父を殺害した本庄茂平次の敵討ちを果たすべく出立した。敵に出会うことが出来るのか、見当もつかない茫漠とした旅の始りである。討たなければ帰藩は許されない厳しい現実を覚悟しなければならないのだ。

「成功の確信も無く、なぜ伝十郎は敵討を決意したのか」という疑問の声があり、「恨みを晴らすことが、この時代の武士の価値観となっていたのでは」との意見が出た。

焦燥の旅路の末に敵討を果たした時、伝十郎は32才になっていた。数年後に病で世を去った彼の一生を思い、やるせなさを含む声が寄せられる。

「主人公に対する作者の寄り添い方が見えず、感情移入できなかった」「新聞記事を読むような機械的な感じ」など作品への不満も上がった一方、「華やかな文化とは別の顔を持つ江戸時代を知った」「水野忠邦や鳥居耀蔵の辣腕など、サイドストーリーも楽しんだ」という人もいて、受け止めは様々である。

2月14日、8名出席。（佐）

次回読書会は4月11日㈬14時

ダフネ・デュ・モーリア「写真家」（創元推理文庫・デュ・モーリア傑作集『鳥』所収）

※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。